

School Library

学校図書館に寄せる思い

未知の事象に出会う新鮮な驚きや、仲間と談義する楽しさ。図書館にはさまざまな魅力がある。図書館があったから、今の自分がいると思える人もいるだろう。今後、学校司書の配置が進めば、学校図書館は、子どもたちがいる間、いつでも開いている場となる。一人になりたいとき、心が沈んだとき、学校図書館にぶらりと足を運ぶ。司書と話しながら、気持ちに合った本を紹介してもらおう。そんな未来図も含めて、学校図書館への思いを各氏に語ってもらった。また今夏には、わが国で初となる国際学校図書館協会による大会が、東京で開催される。その趣旨などをまとめてもらった。

教職員利用で交流活性を

元全国公立学校教頭会副会長 須田敏男

図書館教育にあまり関心のなかった私なので、今回「学校司書」の配置が法制化されたのを初めて知りました。

私が若い頃には、図書館に常駐の方がいなくて、教員の中から図書館担当を決め、図書館の運営をしていました。

近年では、勤務した学校に図書整理員が従事し、運営を行っていました。そのため、図書館担当の教員の負担がかなり軽減されています。

今回の法改訂により、全

国の各学校に学校司書が置かれたことは、教員の負担軽減につながり、とても喜ばしいことです。

学校司書が配置される分、教員として学校司書を支え、図書館を充実させるための関わり方を考えなければなりません。

そこで、注目したいのが、図書法第二条（定義）の一文です。

「…図書、視覚聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料（以下「図書館資料」という）を収集し、整理し、及び保存し、これを

児童又は生徒及び教員の利用に供することによつて」と書かれています。

私が勤務した学校には、職員図書が職員室の書架にありました。当然、教員が利用するので、利便性を考えての配慮です。

そこで、「この職員図書を図書館の中に配置してはどうか」と考えました。

現在、多くの学校では、図書館利用を促すために、図書館祭を開いたり、教員好みの本を紹介したりしていると思います。

このような取り組みも大

切ですが、教職員が図書室をもっと利用し、その姿を子どもに見せるのが、子どもにより刺激を与えるのではないのでしょうか。

教職員が、図書館で教材研究をしたり、授業つくりのための資料を探したりする姿を直接子どもが見るのは、

子どもは、「先生はどんな本を読むのかな」「どのように図書を利用しているのかな」などと、教師が日常生活に活用している生きた図書館利用を観察します。

中には、教師の利用する図書を見なくなる子どもも現れてきます。

「こんな難しい本を読んでいるのか」「あんな本が読めるようになりたい」などと子どもなりに、図書への夢を膨らませると考えられます。

私は、学校司書を図書館に配置する学校が増えるのを期待しています。

そして、図書館を利用している教職員と子どもが関わる場面も生まれます。

日常会話の中に図書に関する会話が増えてきます。生きた図書館利用の指導も可能になります。

「教育は、人なり」と言われます。図書館利用を自ら子どもに示すことが、子どもに大きな影響を与えることは、間違いありません。